様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月　２ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１３４４０

研究課題名（和文）名詞用法形容詞の史的発達への生成統語論的アプローチ

研究課題名（英文）A Generative Approach to the Historical Development of Nominalized Adjectives

研究代表者
山村　崇斗（Yamamura, Shuto）

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：３０７０６９４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：形容詞が名詞として機能しているような事例を、生成文法理論に基づいて分析した。人間を表す表現(例: the poorなど)の古英語の事例を分析する中で、類似構文である形容詞の後ろの名詞の省略(rice wif and earm 'rich woman and poor')が形容詞の対立(rich - poor)を条件としていることがわかった。通説では、このような省略は、形容詞が屈折する言語で可能とされているが、形容詞の対立を条件とすると、現代英語でも理論上可能と予測され、その通り観察されることを示した。また、従来、名詞の省略と考えられた古英語の事例の中には、そうでないものがあることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
古英語は現代英語よりも、動詞や名詞、形容詞が豊かに屈折するので、特に語順については、無秩序のようにみえるほど自由だと思われているが、文法理論の視座からつぶさに観察してみると、語の配列にはやはり秩序があることがわかる。解釈上、そこにあるべき語が省略されるのは言語使用上当然の現象であるが、それがどのような条件下で起こるのかが今現在使われている言語でも、はるか過去に使われていた言語でも共通していることは、背後にある人間の言語能力の一貫性を示している。

研究成果の概要（英文）：I examined nominalized adjectives in English, especially in Old and Present-day English, based on electronic corpora. The whole study shows that ellipsis of a head noun in "rice wif and earm (rich woman and poor)" is possible due to the semantic contrast between two adjectives: i.e. rich - poor. Generally speaking, adjectival inflection is responsible for such ellipsis. Indeed, instances like "the gap between the richer families and the very poor" are attested even in Present-day English. Instead of the adjectival inflection, the semantic contrast successfully provide a theoretical account for the fact that noun ellipsis immediately after an adjective is possible both in Old and Present-day English. In addition, it turned out from the "semantic contrast" point of view, that some examples in Old English text, which has been analyzed as noun ellipsis, are not actual instances of them because of the lack of such contrast.

研究分野：言語学、英語学

キーワード：名詞用法形容詞　生成文法理論　形態統語論　PF削除　英語史　等位接続構造

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)HUMAN 構文における形容詞の形容詞としての振る舞い:　the poor のような定冠詞と必ず共起し、複数名詞句として機能する HUMAN 構文は、現代英語に残された名詞用法形容詞である。定冠詞 the + 形容詞の形式でのみ現れ、*a poor や*the poors のような形式は許されないため、the poor における poor 自体は形容詞だと思われる。

(2)HUMAN 構文における形容詞の名詞としての振る舞い:　形容詞 poor と elderly は、どちらも HUMAN 構文で用いることができる（e.g. the poor、the elderly)。これらが顕在的名詞を共に前置修飾する場合と共に HUMAN 構文を構成する場合とでは、形容詞の語順に差異が認められる（e.g. the poor elderly people – the elderly poor)。このことを考えると、the elderly poor の場合、形容詞 poor がまず名詞となり、これを形容詞 elderly が前置修飾しているとも考えられる。

(3)属格形の HUMAN 構文の盛衰：　Swan 2005 によれば、*the poor's problem のように HUMAN 構文は属格形では用いられないという。しかし、実際の言語使用では、the poor's income や the poor's isolation のような事例がみられる。属格形の HUMAN 構文自体は古英語ではありふれている（e.g. [[þæs^{GEN} synfullan^{GEN}] deað])。しかし、形容詞の屈折が消失すると著しく減少し、1800 年ごろから再びわずかに観察され始めることが報告されている(Yamamura 2010、山村 2016)。

(4)HUMAN 構文の内部構造：　Kester 1996 らによれば、この HUMAN 構文は、現代英語では音形をもたない空の名詞 *pro* を形容詞が前置修飾する[$_{DP}$ the poor *pro*]のような統語構造をもつ。この構造から、属格形の HUMAN 構文の衰退が説明される。形容詞自体の格屈折が中英語で消失すると、所有者を標示するために属格接語-'s を用いるようになるが、[$_{DP}$ [$_{DP}$ the poor *pro*] -'s problem]の構造では空の名詞 *pro* が接語に対する適切なホストとなれない。

(5)空の名詞 *pro* の文法化：　属格形の HUMAN 構文の再興の兆しや HUMAN 構文における形容詞の名詞としての振る舞いは、空名詞 *pro* と同じ素性構成を持つ名詞化接尾辞の出現を示唆する。

２．研究の目的

(1)HUMAN 構文自体は古英語から現代英語に至るまで継続的に観察されるため、史的変化という観点では、大きな変化はなかったと考えられてきたが、属格形の HUMAN 構文の急激な消失と近年の復活という現象が観察されていることから、本研究では、HUMAN 構文の発達史を入念に検めることを目的とする。

(2)これに伴って、HUMAN 構文を取り巻く統語環境の変化や HUMAN 構文自体の内部構造の史的変化を言語変化や文法変化の理論に基づいて説明を試みる。

(3)HUMAN 構文以外にも、形容詞が名詞的に用いられていると思われる事例が史的英語には多く見られるが、それらは形容詞屈折の消失に伴って、同じように消失したといわれてきたため、それらと現代英語まで残存する HUMAN 構文の区別を徹底した調査を通じて、名詞用法形容詞全体の発達史の全容の解明を試みる。

３．研究の方法

(1)電子コーパスを使って事例を収集し、分類する。

①史的英語の事例収集には、Taylor et al. (2003) *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose*、Kroch et al. (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English second edition*、Kroch et al. (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English*、Kroch et al. (2016) *The Penn Parsed Corpus of Modern British English*、Davies (2010-) *The Corpus of Historical American English* といった電子コーパスを用いる。

②現代英語の事例収集には、Davies (2008-) *The Corpus of Contemporary American English* や Davies (2004-) *BYU-BNC* といった電子コーパスを用いる。

(2)HUMAN 構文の内部構造について、現代英語に至るまでに、空の名詞 *pro* を用いる構造からの空の名詞化接辞を用いる構造への変化を仮定し、HUMAN 構文の発達史の全容解明を目指す。

(3)HUMAN 構文として適切な事例を峻別するために、それ以外の名詞用法形容詞の特徴にも注意を払う。

(4)調査によって明らかになった言語事実は、生成文法理論に基づいて統語分析を行う。

４．研究成果

(1)2017 年に実施した一連の研究では、古英語のウェストサクソン方言のテキスト内で、形容詞が名詞前位修飾語として現れている事例を、史的電子コーパスを用いて収集し、合計で 127 例抽出された。抽出された名詞句 127 例は、顕在的主要部名詞の有無や指示詞との共起の有無、そしてそれぞれの要素間の相対的語順について分類された。おおよそ、「指示詞 < swilc/þyllic < oðer/ilk < その他の形容詞 < (主要部名詞)」という語順で現れやすいことが確認された。また、主要部名詞を欠き、名詞用法形容詞とみなせる例は、指示詞の共起に関係なく 58 例あり、古英語における名詞用法形容詞の利用可能性の高さが確認された(Yamamura 2017)。

(2)2018 年に実施した一連の研究では、HUMAN 構文の抽出作業中に現代英語の事例からみられた名詞句省略の事例について調査を進め、分析を試みた。the gap between the richer families and the very poor という事例では、第二等位項 the very poor は、HUMAN 構文として「とても

貧しい人々」を意味するのではなく、先行する名詞句の主要部名詞 families を補い「とても貧しい家庭」と解釈される省略構文である。この種の名詞省略は、形容詞に一致屈折がある言語で可能とされ、実際、古英語では多く観察されたものであるが、中英語以降に形容詞の一致屈折の消失と共に衰退したといわれていたものであった。理論の上では不可能だろうと予測されている名詞句省略の事例が、現代英語でも観察されることが判明したため、当該構文の統語分析は従来のような一致屈折に訴えるのでは、実態を十分に説明ができないことが分かった。現代英語でも名詞句省略が可能であるという視点から、改めてデータを精査し、当該構文やその周辺の統語環境の観察しながら先行研究などを検討していくと、実際には先行する名詞句と省略を含む名詞句とで形容詞が意味上の対立を示す場合に名詞句省略が許されていることが分かった(cf. Corver and van Koppen 2008、Günther 2011、Fischer 2012)。その結果、意味上の対立や対比焦点が省略構文の認可の主要因と据えた統語分析を提案した(山村 1019)。

(3)2019 年に実施した一連の研究では、2018 年の調査研究に引き続き、名詞句省略が現代英語でもみられる事実の観察を継続した。特に、「形容詞＋名詞＋等位接続詞＋形容詞」の語順をもつ句について、古英語と現代英語の観察を行った。従来理論とは異なり、形容詞の一致屈折ではなく、意味的対立こそが名詞句省略の認可条件であるとする主張に基づき、観察を継続したところ、「形容詞＋名詞＋等位接続詞＋形容詞」の語順を持つ句には２種類あることが分かった。

①形容詞に意味的対立がみられるもの：　このタイプでは、例えば、old と new のような対立がみられる上に、「古い方」と「新しい方」のような指示対象が別個の個体であり、２つの形容詞に対してひとつずつ名詞があるように解釈されている。このことから、第二等位項で名詞句が省略された、真の省略構文であると結論付けられた。

②形容詞に意味的対立がみられないもの：　このタイプでは、現代英語の事例でいえば、good men and true のような事例が当てはまり、同様の事例は古英語では多くみられる。この事例では、①のタイプとは異なり、「善良な人」と「誠実な人」という別個の個体を指すのではなく、「善良かつ誠実な人」のように２つの形容詞はひとつの名詞を修飾するように解釈されるものである。従来の一致屈折に基づく分析では、古英語でも①のタイプと同じ省略構文として分析されてしまい、また現代英語では存在しえないと予測されるものであるが、意味的対立に基づく新たな分析によれば、まず省略構文とは分析されえない。また、２つの形容詞に対してひとつの名詞を修飾していることから、等位接続された名詞前位形容詞が何らかの理由で分離した不連続等位接続構造として分析するに至った(山村 2020)。

〈引用文献〉

①Yamamura, Shuto (2010) “The Development of Adjectives Used as Nouns in the History of English,” *English Linguistics* 27, 2, 344-363.
②山村 崇斗 (2016)「英語における名詞用法形容詞の発達史」『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論』、小川芳樹・長野明子・菊池朗(編)、181-196、開拓社、東京。
③Swan, Michael (2005) *Practical English Usage*, 3rd ed., Oxford University Press, Oxford.
④Kester, Ellen-Petra (1996a) “Adjectival Inflection and the Licensing of Empty Categories in DP,” *Journal of Linguistics* 32, 57-78.
⑤Corver, Norbert, and Marjo van Koppen (2009) “Let's Focus on Noun Phrase Ellipsis,” *Groninger Arbeiten zur Germanistischen Linguistik* (GAGL) 48, 3-26.
⑥Yamamura, Shuto (2017) “A Corpus-based Study of Prenominal Adjectives in Old English,” *Data Science in Collaboration* 1, 171-179.
⑦Günther, Christine (2011) “Noun Ellipsis in English; Adjectival Modifiers and the Role of Context,” *English Language and Linguistics* 15, 279-301.
Fischer, Olga (2012) “The Status of the Postposed ‘And-Adjective’ Construction in Old English: Attributive or Predicative,” *Analysing Older English*, ed. by David Denison, Ricardo Bermúdez-Otero, Chris McCully and Emma Moore, 251-284, Cambridge University Press, Cambridge.
⑧山村 崇斗 (2019) 「英語における形容詞残置名詞省略の統語分析」『東海英語研究』1 号、41-57。
⑨山村 崇斗 (2020) 「ラベル付け理論に基づく不連続等位接続構造の分析」『東海英語研究』2 号、51-57。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Yamamura, Shuto	４．巻 2
２．論文標題 Substantive Adjectives and the Prop-Word One in Old and Middle English	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Data Science in Collaboration	６．最初と最後の頁 98-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山村 崇斗	４．巻 1
２．論文標題 英語における形容詞残置名詞省略の統語分析	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東海英語研究	６．最初と最後の頁 41-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yamamura, Shuto	４．巻 1
２．論文標題 A Corpus-based Study of Prenominal Adjectives in Old English	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Data Science in Collaboration	６．最初と最後の頁 171-179
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山村 崇斗	４．巻 2
２．論文標題 英語における形容詞残置名詞省略の統語分析	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東海英語研究	６．最初と最後の頁 41-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松元 洋介・横越 梓・近藤 亮一・山村 崇斗	4．巻 37
2．論文標題 英語史における形式の出現と消失について - 生成文法理論による説明	5．発行年 2020年
3．雑誌名 JELS	6．最初と最後の頁 170-171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 Yamamura, Shuto
2．発表標題 Focus-based Licensing Analysis of NP-ellipsis in English (Poster)
3．学会等名 ELSJ International Spring Forum 2018（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 Yamamura, Shuto
2．発表標題 Focus-based Licensing Approach to Noun Ellipsis and the Pro-form One in English (Poster)
3．学会等名 The 20th Diachronic Generative Syntax Conference（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 Yamamura Shuto
2．発表標題 Noun Ellipsis and One-Pronominalization in Middle English (Poster)
3．学会等名 Tsukuba Global Science Week 2018（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 Yamamura, Shuto
２．発表標題 A Diachronic Approach to "The Old" Constructions
３．学会等名 Tsukuba Morphology Meeting 2017
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yamamura, Shuto
２．発表標題 A Corpus-based Study of Prenominal Adjective Orders in the History of English
３．学会等名 Tsukuba Global Science Week 2017: Industry-Academia Collaboration among Pure, Applied, and Commercialization Researches Based on Linguistic Data（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yamamura, Shuto
２．発表標題 A Diachronic Study of NP-ellipsis in English
３．学会等名 Conceptual and Methodological Alternatives in Theoretical Linguistics
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考